



一昔前、歌手の宇多田ひかるがインターナショナルスクールで学び英語がべらべらになったともてはやされその情報の影響で東京のインターナショナルスクールに申し込みが殺到した事があったと記憶している。日本人にとって英語は必修且つなかなか超えられないハードルでもあるから、親御さんの必死の頼みも解る。私も“幼少時代親がインターナショナルスクールに入れてくれたら私だって英語がべらべらだったかもしれないのに...”とかすかな希望をインターナショナルスクールに寄せたこともあった。どにかくにも親がまず子供に“環境”を与えなければ育つものも育たないだろうと思う。

このポータランドのインターナショナルスクールは俗に私達日本人がイメージするものと180度逆で、日本語、スペイン語、中国語が主言語で授業が行われる。てっきり私はこれら外国語は第二言語として教えられていると思っていたが、例えば、保育園時代(PK)から日本語を選択した場合、クラスは日本語のみで行われ、小学校からはアート、音楽、体育の授業以外は全て日本語、英語の授業は毎日1時間となる。アメリカにいながら日本語漬けの学校生活:インターナショナルスクールというわけだ。インタビューに行ったとき4、5年生のクラスでは丁度理科の実験をしており、先生が結構な速さで授業をされているのに驚いた。子供たちもクラスでは日本語会話のみ、が決まり、見せてもらったノートは、日本の小学校同様レベルに(当たり前なのかもしれないが、私はえらく感心した。)漢字、カタカナ混じりで書かれてあり、自分の小学校時代を懐かしく思い出させてくれた。

ここインターナショナルスクールでは、日本の文部省のカリキュラムと同時に全世界のインターナショナルスクールが使う‘Core Knowledge’というカリキュラムを導入している。現在ここで働

き始めて9年目のゆかこ先生は“この生徒たちの理科、算数は特にレベルが高くクラスも少人数だから一っとしてはいられないんですよ。普通の2倍程の速さでクラスが進んでゆきますね。”と話す。ゆかこ先生は中国返還前、香港の日本人学校(生徒数1,800人)で教えた経験の持ち主。

子供達の適応性については、やはり柔軟性のあるPKは言葉がわからなくても毎日の繰り返しの中で自然と日本語をしかも驚く速さでマスターしているとのこと。PK(保育園)のみでゆかこ先生は、インターナショナルスクールにはほぼ10年勤めていらっしゃる。PKやK(幼稚園)の生徒もちろん日本語を話す親を持つ子だけではないが子供達はみな日本語で行われるクラスを興味津々楽しんでた。(言葉の壁を感じない純粋な時代は、なんと素晴らしいことに満ちている事か...)



言語をマスターするには勿論早いにこしたことはないし、日本語と英語のバイリンガルを目指すなら小学校からよりPKもしくはKから始めたほうが本人もずっと楽に学べるだろう。学校側としても早期年齢の入学をお勧めする。(と同時にインターナショナルスクールのメリットは私立なので、いつからでも入学可能で様々なサポートも受けられるところ。公立と違い少人数だから生徒も必要な注意を払ってもらえる)ここでは主な授業は全て日本語で行われるので、ある程度日本語が理解できることは小学入学時の条件ではある。入学に際しては語学カテストが行われる。しかし、1、2年担当のみゆかこ先生のクラスに特例で日本語経験が全くないアメリカ人の1年生が編入してきた。彼女の親御さんとも話し合い、必死の努力と苦勞を承知のうえでの入学だったようだ。しかし、え

みこ先生の心配とは裏腹に生徒の日本語はめきめきと上達し先生は驚きをかかせない。もちろん、ここに到達するには本人の努力と、みこ先生の放課後の特別指導など、学校、家庭からの両方のサポートがあった。また、毎日の日本語での学校生活とみんなの努力が生徒の心と身に染み込んでくる素晴らしい環境の中で学べたことも上達を促した理由だろう。しかし、それを素直に吸収する子供の柔軟性は大人の懸念を裏切る必殺技のようだ。



さて、それでは英語の方はどうなのか...

新学期始めに英語レベルを調べるテストが行われ、それによって生徒の受ける英語のクラスが決まる。要するに英語の授業は学年別ではなくレベル別。日本から編入してきて英語の苦手な子供達には必要に応じて個別指導が行われる。学校で主要科目を日本語で学ぶ分、宿題を英語で出すなどして英語の方は補っている。それと毎日の時間割だが、1年生から既に6時間授業なのだ。朝8時15分頃から子供達が登校し8時30分頃から授業が始まる。以前、1、2年生の算数を干渉していたが疲れて集中できないと、思考‘の教材は午前中に持ってくるようしているのだと。(納得...)

‘インターナショナル’なのは中国語、スペイン語、日本語混じりのプレイグラウンドだけではない。英語のクラスは他の言語専攻の生徒と合流する。時にはアートや音楽も合流する。(人数に応じて臨機応変対応)。結果として、英語以外の言葉を話す友達も出来るのだ。スペイン語専攻の子を持つ当校 Marketing Director のリングさんが親子で中華料理屋に行ったときのこと。子供が“ハローは中国語で‘ニーハオ’なんだよ”と教えてくれ

ただと、びっくりして訳を尋ねると友達に中国語を話すんだ、ということだった。子供達は自然に“違い”を受け入れ、受け入れられ、それが当たり前前の世界で生活している。自然に自分の違いが肯定的な自己、同一性を生み出しそれを自然に受け入れる環境というのは現在の社会に必要とされるものではないか。

外には、2年前に造られた‘アウトドア クラブルーム’というのが有る。夏や、天気の良い日に利用されるのだが、円形の屋根付きベンチと言った感じだ。建築家ガウディのグエル公園を思わせるデザインで私は好きだ。その隣には科学の授業の一環としてKから1年生が作物を育て収穫できるガーデンがある。



学校敷地の一番平坦部分にありエクササイズ無しで行けるのが今年3月にオープンした新館。アート、音楽の部屋を含めクラスルームが11ある。高い天井がとても気持ちよいスペースだ。

気になる授業料は勿論私立なので安くはないがファイナンシャルサポートもあるので是非相談して欲しい。リングさんが優しく丁寧に説明してくれる。授業料が高い分、子供たちにも、その結果親にも還元される利益は大きいだろう。

先生たちはみな教えることが好きでそしてこの学校が好きだという。2、3年生担当のまきみ先生はここでは2006年から始めた新しい先生だが、“とても楽しいです”と笑顔なのが印象的だった。爽やかに楽しく親身になって下さる先生方に直接話を聞いてみるのも良いだろう。

by Eri Luman